現在の日本におけるバレエ・コンクールの開催状況（序）

—バレエ教育の視点からの問題点の検討—

渡辺　碧（日本女子体育大学　非常勤講師）

Current Status of Ballet Competitions in Japan (Introduction)

- Study of Problems from the Viewpoint of Ballet Education -

Midori, WATANABE (Japan Women's College of Physical Education, Adjunct lecturer)

Abstract

This study focused on clarification of the status and contents of classical ballet competitions in Japan based on information obtained via an Internet survey. In addition, a comparison was made between the clarified situation and the problems with classical ballet competitions to identify today's problems in Japan from the viewpoint of ballet education. The study produced the following findings:

1. There were 101 classical ballet competitions in 2015, which were categorized into 69 types in terms of the titles. Ballet competitions were held every month somewhere in Japan, nearly half of which were similar in terms of contents. In particular, many of the competitions started in the last five years.
2. The classical ballet competitions were roughly categorized into three types: typical competitions for ranking, pre-concours types, and international competitions. The pre-concours competitions in particular contributed significantly to ballet education.
3. Problems with classical ballet competitions identified in this study were as follows:
   1) Information on the competitions that include the organizers, objectives, and criteria for examinations, which the participants should consider in choosing competitions, were not provided appropriately in many cases.
   2) From the viewpoint of ballet education, special consideration should be given to participation by children in the ballet competitions because of the different risks associated with their participation (particularly in the case of the lower and middle grades of elementary school).

Key Words: classical ballet, ballet competition, dance concours, ballet education

Ⅰ．序

Ⅰ－1．研究の背景

クラシック・バレエ（以後、バレエとする）は、これまでの長い歴史の中で世界各地の幅広い年代層に鑑賞・学習され、今日までの発展を遂げてきた。特に日本における習い事としてのバレエは、舞踊ジャンルの中でも多くの人々に学習されており、学習者人口は推定40万人以上といわれている（海野ほか，2012）。その年齢層は3歳以下の未就学児から80歳以上の成人に至るまで実に幅広い。

一方、海野らの同調査によると、バレエ・コンクール（以後、BCとする）については、学習者が多いこ

とに比例して、調査対象（1304）の約半数のバレエ教育機関にBCへの参加者がいることが分かっている。海野ら（2012：19）は、バレエ業界において「コンクールへの参加に積極的なバレエ教室が少なくない」と述べているが、近年、日本国内では数多くのBCが開催されており[注1)]、その数は世界一と騒がれるほどである（安達，2014：8）。

ではなぜこれほどまでに日本においてBCは盛んであり、バレエ学習者たちはBCに参加するのだろうか。バレエに限らず、コンクールに参加する目的は以下の理由が考えられる。まず一つは、自己の実力を測るための手段として。そして、次に自分をアピールする（もしくは将来自分が踊る場を得る）ための手段として。また、うらわ（2007：35）は「まず、踊る場として。大都市部でもそうだが、とくにそれ以外の地域では公演はもちろん、発表会もなかなかなく、舞台で踊るにはコンクールしかないという現実もある。～中略～ 一方、指導者の側からは、コンクール上位者を出すと指導者が注目され、生徒集めに有利となる。さらに率直にいって、振付・指導が一部の教師たちの収入の途になっていることも否定できない。」と、述べる。さらに日本におけるBCとは「舞台経験を積むための場所」。そして「集中して練習し、上達するための目標」という意味合いが強く（うらわ，2013：50）、これらを参加目的とする参加者も多く存在することが推察される。

このように、BCが日本において盛んであるという現状は、参加者やそれを指導する指導者などの様々な目的によって支えられている。その目的は、参加者や指導者などによってそれぞれ異なり、上記に挙げたものだけにその理由を集約することは難しい。しかし、これまで挙げてきたBCへの参加目的を踏まえると、BCは、全国各地で行われている日本のバレエ教育において、教育の一つのツールとして、バレエ学習者やその指導者に利用されていると考えることができるだろう。

日本でのBC開催の大きな意義は、BCをきっかけとして、世界に認められる日本人ダンサーを毎年のように輩出していることや、日本のバレエの水準が年々上昇していることなどである。しかしその一方で、BCが引き起こす弊害も指摘されている。例えば、コンクールで好評価を得ても、ダンスの世界を離れてしまう若手ダンサーが多くみられること（夏目ほか，1994：33-34）。回転や跳躍などのテクニックばかりを重視し過ぎてしまい、本来のバレエの美しさであるターン・アウトやポール・ド・ブラなどの基礎を疎かにしてしまうこと。曲目に合った役の表現・解釈が出来ない（阿部，1999：26、波多野ほか，2007：38-40）。このような問題の他にも、一人の踊りが3分程度のヴァリエーション（以後、Vaとする）のみで評価されてしまうという審査方法の問題[注2)]（石井，2007：36）。参加者が納得できるような明確な審査基準の設定について。従来伝統的に受け継がれてきた振付を軽視し、参加者の踊りを良く見せるために振付を改訂してしまうという振付に関する問題（阿部，1999：30）。そして、参加者の舞台マナーについてなど、踊りの内容に関することだけでなく、それ以外のコンクール開催に伴う根本的な問題も指摘されている。

Ⅰ―2．日本の舞踊コンクールの歴史と先行研究の検討

日本のバレエを含む舞踊コンクールの歴史は古い。1939年に現在の東京新聞の前身である都新聞が主催した「全国舞踊コンクール」が日本最古の舞踊コンクールであり、今年（2016年）で73回目の開催となった[注3)]。その後、1967年に埼玉舞踊協会が主催する「埼玉全国舞踊コンクール」、1983年には日本バレエ協会が主催する「全日本BC」、1986年には、神戸新聞主催の「こうべ全国洋舞コンクール」がスタートした。1980年代までには数えるほどしかなかったBCが、1990年代に入ると次々に新しいコンクールが生まれ、日本はいまや世界一コンクールの多いコンクール大国となったと言える。

このような背景の中、舞踊コンクールに関する研究は、欧米に比べ数は少ないが、これまでにいくつか報告されている。まず、児童舞踊コンクールに関する研究（田中，1988）と、国際創作舞踊コンクールの入賞作品に関する研究が6件（林ほか，1989、頭川ほか，1989・1990・1991・1992・2003）。舞踊コンクールの

採点方法に関する研究（若松ほか，1996）と、現代舞踊コンクール入賞者に関する研究（米澤ほか，2012）がそれぞれ1件ずつ。そして琉球舞踊コンクールに関する研究（花城，2000・2001・2005・2006）が4件、その他コンクールで上演された台湾住民舞踊に関する研究（張ほか，2015）などがあるが、これまでBCを主題として扱った研究は、ほとんど見当らない。

一方、BCを取り扱った書籍には、『BCパーフェクト・ガイド』（以後、『BCPG』とする）、『BC　審査員は何を視るか？』、『全国舞踊コンクール50年史』などがあり、『BCPG』は、2013年6月末時点の国内BCの情報を掲載している。しかし、それ以外は、『バレリーナへの道』や『ダンスマガジン』、『週刊オン・ステージ新聞』などのバレエ関連諸誌でのコンクール開催報告や上位入賞者の掲載、コンクール開催広告がほとんどである[注4)]。そのため、年間全国でどれくらいのBCが開催されているのか。具体的にどのような内容のBCがあるのか。参加者の人数はどの程度なのか。部門の枠や参加費の具体的な金額。審査方法や審査員の詳細な情報。審査情報公開や賞品・賞金の有無などという、最新の国内におけるBCの動向についての基礎資料はほんの少ししか見つけることが出来ない。

Ⅱ．目的

本研究では、①現在の日本におけるBCの開催状況とその内容を明らかにする。②BC審査員経験者や舞踊評論家などによって、これまで指摘されてきたBCが抱える問題点と、①の結果とを照らし合わせ、バレエ教育の視点から見た現在の日本のBCの問題点を明らかにする。また、BCに関する基礎資料を得ることを目的とする。

Ⅲ．方法

本研究は、上記の目的を達成するために以下の3つの方法で情報を収集し、調査を行った。

①『BCPG』に掲載されている「国内のおもなコンクール一覧」を参考に、2015年一年間に日本で開催されている、バレエ部門もしくはバレエの審査があるコンクールの情報を集計した。各BCの情報は、主催団体が運営している（もしくは運営に関わっていると考えられる）ホームページ（以後、HPとする）にアクセスし、情報を収集した。

②①の一覧に掲載されていないBCを検索するための手段として、『ダンスマガジン』、『旬刊音楽舞踊新聞』、『週刊オン・ステージ新聞』に掲載されているBCに関する記事、もしくは広告を参考にし、情報を収集した[注5)]。

③上記①②でヒットした以外のBCを検索するため、インターネット検索サイト「Google」を用いて、「バレエ」「コンクール」というキーワードを入力して検索を行った。

調査期間は、2016年6月30日～9月5日であった。コンクールの内容については、2015年度の情報掲載がHP上にない場合があった。その場合は、ほぼ同内容で開催していると考えられる2016または17年度のデータを参考にした（ただし、2015・16・17年ともに開催があるコンクールに限る）[注6)]。

調査項目は、①BCの名称、②開催回数、③開催日、④開催地、⑤主催団体の名称、⑥開催目的、⑦部門、⑧審査内容、⑨審査基準・規定の提示の有無、⑩審査員情報の有無、⑪審査情報公開の有無、⑫プロ契約、海外留学など、将来的な活動に繋がる賞品の有無、⑬他のコンクールとの関連の有無である。

本調査においてインターネット検索を用いた根拠は、すでに述べたように国内の最新のBC情報を集約し

た書籍がかなり少ない。そのため、文献による情報収集は困難であると考え、本研究においてこの調査方法を採用した。またコンクール主催者側にとっても、参加者に広報するためにまず考える手段が、インターネットによるものであると推察される。そのため、この調査方法が有効であると判断し、この方法を採用した。

収集した情報は、Microsoft Excel 2013 for Windows を使用し、単純集計を行った。今回の調査は、BC に関する基礎資料を得ることを目的としているため、単純集計にとどめ、日本における BC の全体的な傾向について捉えた。集計結果とこれまでに検討されてきた BC の問題点とを照らし合わせることにより、本調査から見える BC が抱える問題点についての検証を行った。

Ⅳ. 結果

Ⅳ－1．2015年一年間の BC 開催状況

(1) 開催総数と開催頻度、開催地について

2015年一年間に開催されたコンクールの一覧を表1に示す。一年に二回以上、同一団体による開催があった場合には、グレーを用いて表示した[注7)]。また、一つの団体から生まれた支部についても同一団体扱いとした。今回の調査で見つかった BC の総数は、101件であった。開催日初日で分類した開催月別に見てみると、8月の24件が最も多かった。一年間を通して、コンクールの開催がない月はなかった。

表1：2015年一年間のコンクールの総数

No.	開催月	開催日	回数	コンクール名	主催者（主催の記載がない場合は、事務局名を記載）
1	1月 (6)	1/3-6	11	ザ・バレコン in 福岡	青少年のためのバレエ・コンクール実行委員会
2		1/3-8	18	NBA 全国バレエコンクール	NPO 法人　NBA バレエ団
3		1/5-6	6	NAMUE クラシックバレエコンクール 名古屋	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
4		1/5-7	2	全国鎌倉プレバレエコンクール	不明（全国鎌倉プレバレエコンクール事務局）
5		1/11-12	4	琉球新報プレバレエコンクール	琉球新報社
6		1/11-12	5	琉球新報国際バレエコンクール	琉球新報社
7	2月 (4)	2/1	不明	バレエ エキシビジョン2015（Etoile de Scene Ballet Concours　エトワルド　セヌ　バレエコンクール）	不明（M・A ☆ Art Ballet company 事務局）
8		2/8	1	Japan Ballet Competition 滋賀 2015	Japan Ballet Competition 実行委員会
9		2/8-12	15	オールジャパンバレエユニオンコンクール	オールジャパンバレエユニオン
10		2/21-22, 3/21-22	15	OSAKAPRIX 全国クラシックバレエ・コンペティション2015	産経新聞社　産経新聞開発会社
11	3月 (17)	3/7-8	2	ダンス・コンペティション in 仙台2015	ＤＣＳ実行委員会
12		3/16-18	5	全国鎌倉バレエコンクール	不明（全国鎌倉バレエコンクール事務局）
13		3/22	3	Program for Competition　in 岡山	不明（プログラムフォーコンペティションイン岡山事務局）
14		3/23-24	10	エデュケーショナル・バレエ・コンクール	Prix du Japon 株式会社、一般社団法人ロシアバレエメソッド教育振興協会
15		3/24-25	6	NAGANO 全国バレエコンクール	NAGANO 全国バレエコンクール　実行委員会
16		3/25-26	4	NAMUE クラシックバレエコンクール 大阪	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
17		3/25-26	3	ふくおか全国バレエコンクール	フルール全国バレエコンクール実行委員会
18		3/25-27	4	全国バレエコンクール in 八王子	全国バレエコンクール in 八王子実行委員会
19		3/24-4/5	72	東京新聞・全国舞踊コンクール	東京新聞
20		3/26	2	仙台ＮＢＡジュニアバレエコンクール	不明（NBA バレエ団コンクール事務局）
21		3/26	1	Japan Ballet Competition 東京 2015	Japan Ballet Competition 実行委員会
22		3/30-31	4	FLAP 全国バレエコンクール2015　春	不明（FLAP バレエコンクール事務局）
23		3/30-31	5	Hears&Mind　バレエコンクール	不明（Hearts & Minds バレエコンクール制作委員会）
24		3/30-4/1	6	クリエ全国バレエコンクール	株式会社クリエバレエ企画
25		3/31-4/1	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 福岡	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
26		3/31-4/2	10	伊達クラシックバレエコンペティション	伊達クラシックバレエコンペティション実行委員会
27		3/31-4/2	13	北海道バレエコンクール	公益社団法人　日本バレエ協会北海道支部

28	4月 (7)	4/1-3	2	全国ＭＩＥバレエコンペティション	株式会社 abs company 全国ＭＩＥバレエコンペティション委員会 実行委員長　樫野　隆幸
29		4/2-3	4	ザ・バレコン mini 岡山	青少年のためのバレエ・コンクール実行委員会
30		4/10-12, 18-19	15	まちだ全国バレエコンクール	NPO 法人　町田バレエ育成振興会
31		4/18	4	NAMUE クラシックバレエコンクール 東京	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
32		4/19	3	山陰バレエコンクール	公益社団法人　日本バレエ協会山陰支部
33		4/19	1	鹿児島 NBA ジュニアバレエコンクール	不明（NBA バレエ団コンクール事務局）
34		4/29	1	Japan Ballet Competition 高松　2015	Japan Ballet Competition　実行委員会
35	5月 (10)	5/1	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 神戸	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
36		5/2	5	日本バレエ協会沖縄支部　プレコンクール	公益社団法人　日本バレエ協会沖縄支部
37		5/2	31	日本バレエ協会沖縄支部　児童バレエコンクール	公益社団法人　日本バレエ協会沖縄支部
38		5/2-4	32	日本バレエ協会沖縄支部　バレエコンクール	公益社団法人　日本バレエ協会沖縄支部
39		5/2-5	13	世界に翔くバレエダンサーのための2015 バレエ・コンクール ＩＮ 横浜	公益社団法人　日本バレエ協会関東支部
40		5/3-4	7	全国ジュニアバレエぷれコンクール2015	NPO 法人　町田バレエ育成振興会
41		5/3-6	28	こうべ全国洋舞コンクール2015	こうべ全国洋舞コンクール実行委員会
42		5/5	1	エスポワール全国バレエコンクール2015	エスポワール全国バレエコンクール実行委員会
43		5/6,13-14	3	Japan Dance Competition	公益財団法人 橘秋子記念財団
44		5/10	15	シュミレーション　バレエ　コンペティション2015	オールジャパンバレエユニオン
45	6月 (1)	6/6	1	Japan Ballet Competition 石川 2015	Japan Ballet Competition　実行委員会
46	7月 (14)	7/5	2	札幌ＮＢＡジュニアバレエコンクール	不明（NBA バレエ団コンクール事務局）
47		7/15-17	2	国際バレエコンクール　イン　名古屋	フランス・バレエ国際コンクール事務局
48		7/21	不明	なかのセミナーコンペティション	なかの洋舞連盟事務局
49		7/21-24	8	ザ・バレコン in 大阪	青少年のためのバレエ・コンクール実行委員会
50		7/23-24	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 京都	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
51		7/22-29	48	埼玉全国舞踊コンクール2015	埼玉県舞踊協会
52		7/26	8	スリーピング　ビューティー全日本バレエコンクール	株式会社バウンドプロモーション
53		7/28-31	9	ザ・バレコン in 東京	青少年のためのバレエ・コンクール実行委員会
54		7/28-31	4	全国クラシックバレエ inHIRAKATA	ダンスアヴェニュー"D's" バレエコンクール in HIRAKATA 制作実行委員会
55		7/29-31	21	全国プレコンクール	NPO 法人 NBA バレエ団
56		7/30	2	Japan Ballet Competition 福岡 2015	Japan Ballet Competition　実行委員会
57		7/31	4	NAMUE クラシックバレエコンクール 熊本	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
58		7/31	9	P.B.K（Passion du Ballet à KYOTO）サマーコンクール2015	P.B.K 実行委員会
59		7/31-8/2	3	座間全国舞踊コンクール	座間文化芸術振興会 / 座間全国舞踊コンクール実行委員会
60	8月 (24)	8/2-4	4	エヴァ・エフドキモワ記念　エデュケーショナル バレエ　コンペティション・プレパラトリー	エデュケーショナル・バレエ・コンペティション事務局
61		8/3-7	13	全国ジュニア・バレエ・コンクール　ジャパングランプリ2015	JGP 大会実行委員会
62		8/4	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 北海道	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
63		8/4-5	3	福岡 NBA ジュニアバレエコンクール	不明（NBA バレエ団コンクール事務局）
64		8/4-6	7	FLAP 全国バレエコンクール2015　夏	不明（FLAP バレエコンクール事務局）
65		8/7	3	広島ＮＢＡジュニアバレエコンクール	不明（NBA バレエ団コンクール事務局）
66		8/9-16	17	東京なかの国際ダンスコンペティション	なかの洋舞連盟事務局
67		8/11	6	NAMUE クラシックバレエコンクール 金沢	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
68		8/11-13	5	かわさき全国バレエコンクール	バレエコンクール実行委員会 in かわさき
69		8/11-16	19	バレエコンペティション 21	バレエコンペティション 21
70		8/12-16	26	全日本バレエ・コンクール2015	文化庁、公益社団法人 日本バレエ協会
71		8/13-14	4	多摩シティ全国バレエコンクール	多摩シティ・全国バレエコンクール実行委員会
72		8/13-15	11	バレエコンペティション in 奈良	奈良国際バレエ工房
73		8/18-19	3	大阪ＮＢＡジュニアバレエコンクール	不明（NBA バレエ団コンクール事務局）
74		8/18-20	不明	2015 全国つくば洋舞コンクール	茨城県洋舞踊協会 つくばバレエコンクール事務局
75		8/18-23	19	ザ・バレコン in 名古屋	青少年のためのバレエ・コンクール実行委員会
76		8/19-21	5	わかやま全国バレエコンクール	フルール全国バレエコンクール事務局
77		8/19-21	2	東京シティ・バレエ団全国バレエコンペティション	一般財団法人　東京シティ・バレエ団
78		8/21-23	13	全国プレバレエコンクール in さがみはら	合同バレエグループさがみはら第14回全国プレバレエコンクール in さがみはら実行委員会
79		8/26-27	2	おかやま全国バレエコンクール	フルール全国バレエコンクール事務局
80		8/26-30	25	全国バレエコンクール in Nagoya	CJB 中部日本バレエ団
81		8/27-28	3	豊田世界バレエ＆コンテンポラリー　ダンスコンペティション	エトワールバレエ団実行委員会（チャイコフスキー記念豊田バレエ学校／NPO 法人豊田シティバレエ団）
82		8/27-28	3	NAMUE クラシックバレエコンクール 高松	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
83		8/28-30	3	湘南バレエ・コンペティション	湘南バレエ・コンペティション事務局

84	9月 (4)	9/4-5	5	Dance Creation Award	ダンス・クリエーション・アワード実行委員会　代表・斎藤千雪／前田圭蔵／井本篤
85		9/5-6	不明	プリンシパルコンペティションＴＶ	プリンシパルコンペティションＴＶ実行委員会
86		9/19	2	Japan Ballt Competition 名古屋 2015	Japan Ballet Competition　実行委員会
87		9/25-26	5	NAMUE クラシックバレエコンクールグランドファイナル	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
88	10月 (1)	10/10-12	1	びわ湖・洋舞コンクール in もりやま	びわ湖・洋舞コンクール実行委員会
89	11月 (3)	11/12-15	30	ヨコハマ・コンペティション	公益社団法人　神奈川県芸術舞踊協会
90		11/18-22	不明	ユースアメリカグランプリ（YAGP）2016日本予選	YAGP 日本事務局
91		11/19-23	9	Passion du Ballet à Kyoto 京都バレエコンクール 2015 ウィンターCompetition	P.B.K 実行委員会
92	12月 (10)	12/5-6	4	NAMUE クラシックバレエコンクール 広島	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
93		12/6	1	さっぽろ全国バレエコンクール	フルール全国バレエコンクール事務局
94		12/22	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 神奈川	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会
95		12/23-26	10	エヴァ・エフドキモワ記念　エデュケーショナルバレエ　コンペティション	エデュケーショナル・バレエ・コンペティション事務局
96		12/23, 25-26	3	Tokyo Art Bridge バレエコンクール	東京アートブリッジ事務局
97		12/24-25	4	FLAP 全国バレエコンクール2015　冬	不明（FLAP バレエコンクール事務局）
98		12/25-28	12	ザ・バレコン in 福岡	青少年のためのバレエ・コンクール実行委員会
99		12/26-27	6	琉球新報国際バレエコンクール	琉球新報社
100		12/26-28	3	とうきょう全国バレエコンクール	フルール全国バレエコンクール事務局
101		12/30	2	Japan Ballet Competition 兵庫　2015	Japan Ballet Competition　実行委員会

BC の開催回数を集計したものを図1に示す。コンクールが開始されて5回以内のものは、57件（56%）と最も多かった。また、開催20回以内のコンクールが全体の約80% 以上を占めていることが読みとれる。

コンクールの開催地を集計したものを表2に示す。この表から、関東地方での開催が43件（42.6%）と最も多いことが分かるが、全国各地で BC が開催されていることが分かる。

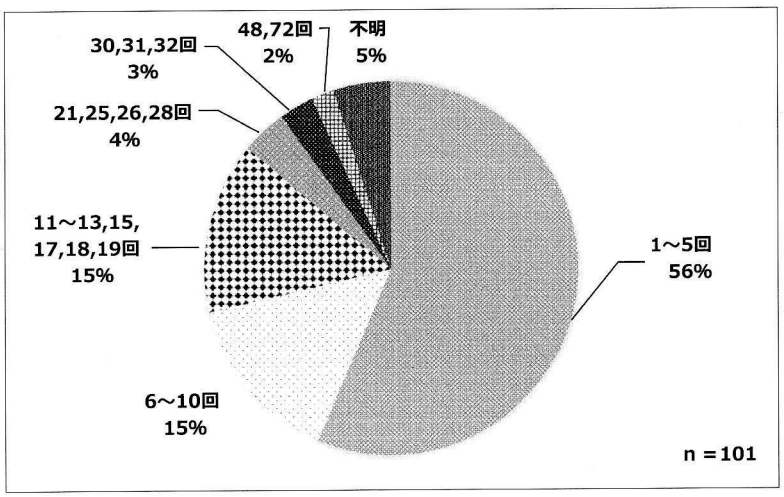

図1：開催回数

表2：開催地　n=101

都道府県別		地区別	
北海道	4	4	北海道
宮　城	3	3	東北
茨　城	1	43	関東
神奈川	10		
埼　玉	4		
千　葉	1		
東　京	27		
愛　知	8	12	中部
石　川	2		
静　岡	1		
長　野	1		
大　阪	5	17	近畿
京　都	3		
滋　賀	2		
奈　良	1		
兵　庫	4		
三　重	1		
和歌山	1		
岡　山	3	6	中国
鳥　取	1		
広　島	2		
愛　媛	1	2	四国
香　川	1		
鹿児島	1	8	九州
熊　本	1		
福　岡	6		
沖　縄	6	6	沖縄

(2) 主催団体について

表1において年間二回以上、同一団体によって開催されているコンクールだけを抽出して表3に示す。

表3：同一主催団体によるコンクール

コンクール数	開催回数	コンクール名	主催団体の数	主催者（主催の記載がない場合は、事務局名を記載）	コンクールの種類
1	2	全国鎌倉プレバレエコンクール	1	不明（全国鎌倉プレバレエコンクール事務局）	1
2	5	全国鎌倉バレエコンクール		不明（全国鎌倉バレエコンクール事務局）	2
3	6	NAMUE クラシックバレエコンクール 名古屋	2	NAMUE クラシックバレエコンクール実行委員会	3
4	4	NAMUE クラシックバレエコンクール 大阪			
5	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 福岡			
6	4	NAMUE クラシックバレエコンクール 東京			
7	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 神戸			
8	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 京都			
9	4	NAMUE クラシックバレエコンクール 熊本			
10	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 北海道			
11	6	NAMUE クラシックバレエコンクール 金沢			
12	3	NAMUE クラシックバレエコンクール 高松			
13	5	NAMUE クラシックバレエコンクール 神奈川			
14	4	NAMUE クラシックバレエコンクール 広島			
15	5	NAMUE クラシックバレエコンクール グランドファイナル			4
16	9	P.B.K (Passion du Ballet à KYOTO) サマーコンクール2015	3	P.B.K 実行委員会	5
17	9	Passion du Ballet à Kyoto 京都バレエコンクール2015 ウィンター Competition			6
18	4	エヴァ・エフドキモワ記念　エデュケーショナル　バレエ　コンペティション・プレパラトリー	4	エデュケーショナル・バレエ・コンペティション事務局	7
19	10	エヴァ・エフドキモワ記念　エデュケーショナル　バレエ　コンペティション			8
20	18	NBA 全国バレエコンクール	5	ＮＰＯ法人　ＮＢＡバレエ団	9
21	21	全国プレコンクール			10
22	2	仙台ＮＢＡジュニアバレエコンクール		不明（NBA バレエ団コンクール事務局）	11
23	1	鹿児島 NBA ジュニアバレエコンクール			
24	2	札幌ＮＢＡジュニアバレエコンクール			
25	3	福岡 NBA ジュニアバレエコンクール			
26	3	広島ＮＢＡジュニアバレエコンクール			
27	3	大阪ＮＢＡジュニアバレエコンクール			
28	4	ザ・バレコン mini 岡山	6	青少年のためのバレエ・コンクール実行委員会	12
29	11	ザ・バレコン in 福岡			13
30	8	ザ・バレコン in 大阪			
31	9	ザ・バレコン in 東京			
32	19	ザ・バレコン in 名古屋			
33	12	ザ・バレコン in 福岡			
34	15	シュミレーション　バレエ　コンペティション2015	7	オールジャパンバレエユニオン	14
35	15	オールジャパンバレエユニオンコンクール			15
36	4	FLAP 全国バレエコンクール2015　春	8	不明（FLAP バレエコンクール事務局）	16
37	7	FLAP 全国バレエコンクール2015　夏			17
38	4	FLAP 全国バレエコンクール2015　冬			
39	1	Japan Ballet Competition 滋賀 2015	9	Japan Ballet Competition　実行委員会	18
40	1	Japan Ballet Competition 東京 2015			
41	1	Japan Ballet Competition 高松 2015			
42	1	Japan Ballet Competition 石川 2015			
43	2	Japan Ballet Competition 福岡 2015			
44	2	Japan Ballet Competition 名古屋 2015			
45	2	Japan Ballet Competition 兵庫 2015			
46	17	東京なかの国際ダンスコンペティション	10	なかの洋舞連盟事務局	19
47	不明	なかのセミナーコンペティション			20
48	13	北海道バレエコンクール	11	公益社団法人　日本バレエ協会北海道支部	21
49	3	山陰バレエコンクール		公益社団法人　日本バレエ協会山陰支部	22
50	5	日本バレエ協会沖縄支部　プレコンクール		公益社団法人　日本バレエ協会沖縄支部	23
51	31	日本バレエ協会沖縄支部　児童バレエコンクール			24
52	32	日本バレエ協会沖縄支部　バレエコンクール			25
53	13	世界に翔くバレエダンサーのための2015 バレエ・コンクール IN 横浜		公益社団法人 日本バレエ協会関東支部	26
54	26	全日本バレエ・コンクール2015		文化庁、公益社団法人 日本バレエ協会	27

55	15	まちだ全国バレエコンクール	12	NPO 法人　町田バレエ育成振興会	28
56	7	全国ジュニアバレエぷれコンクール2015			29
57	5	琉球新報国際バレエコンクール	13	琉球新報社	30
58	6	琉球新報国際バレエコンクール			
59	4	琉球新報プレバレエコンクール			31
60	3	ふくおか全国バレエコンクール	14	フルール全国バレエコンクール事務局	32
61	5	わかやま全国バレエコンクール			
62	2	おかやま全国バレエコンクール			
63	1	さっぽろ全国バレエコンクール			
64	3	とうきょう全国バレエコンクール			

この表より、64件の BC が14の団体によって開催されており、残りの37件については年に一度だけ開催している団体であることが分かる。主催団体は全部で51団体あった。年に二回以上開催している14団体の中には、全国各地で BC を行っている団体が6件あった。また、プレコンクール（以後、PC とする。プレパラトリーも PC として扱う）[注8] と呼ばれる、コンクール出場を目指すための練習の場として設置されているものと一緒に、BC を開催している団体も6件みられた。

次に主催団体の分類を図2に示す。この図より、全体の約60% がコンクールのために設立された「実行委員会」や「事務局」であることが読み取れるが、これらの詳細情報を記載しているものはほとんど見当らなかった。

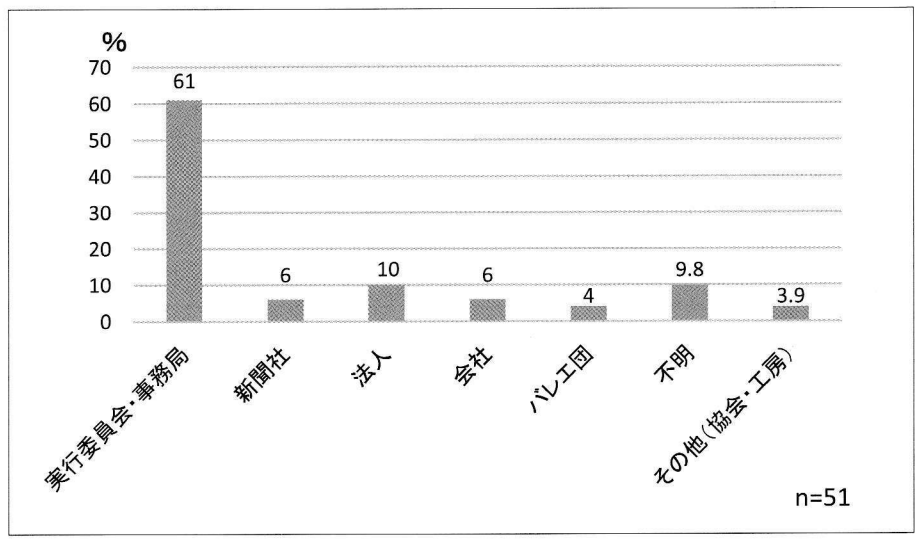

図2：主催団体の分類

Ⅳ－2．コンクールの内容について

(1) コンクールの種類

表1で明らかになったコンクールを内容別に分類するため、同一主催団体による同内容のもの（設置部門や審査内容、賞品などが同じもの）が、年に二回以上開催された場合には、何度開催をしても一種類として扱って集計を行った。一つの団体から生まれた支部による開催（支部予選）については、支部によって内容が異なるため、今回は一つの独立したものとして集計した。2015年一年間に開催されたコンクールは名称別に分類すると、全部で69種類あった。このことから、101件の総コンクール数のうち、32種類（全体の約半分）が、年間を通して重複して開催されていることが分かる（重複しているものは、すでに表3に示したものである）。

PC と題されたコンクールは全部で7件あった。国際的なコンクール[注9] は5件あり、そのうち海外大会の

予選となっているものは1件あった。

(2) 開催目的、部門の設置状況

開催目的を図3に示す。これは各コンクールの開催目的に書かれている内容を集計したものである。開催目的において、最も多かった内容は、「次代の発掘・育成・教育、人材発掘・育成」が62%、「(舞踊) 文化・芸術の普及・振興・発展のため」が30%、「不明」が29% であった。「その他」には、「自己啓発」、「バレエ文化教育の見直し」、「現時点での状況把握」、「若者の意識づくり・模擬体験」、「交流の場の提供」、「世界のスクールで学べる・世界へアピールできる・著名人に見てもらえる機会の提供」などがあった。

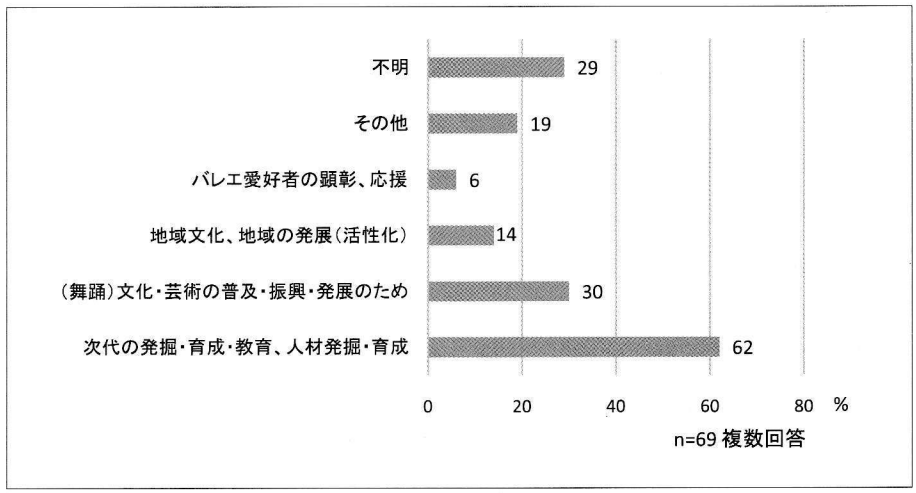

図3：開催目的

次に部門の設置状況についてである。1件（「なかのセミナーコンペティション」）を除くすべてのコンクールにおいて、年齢（学年）別部門を設定していた（全68件）。男女別部門の設置状況については、男女混合で部門を設置しているものが56件（81.2%）。男女別が4件。部門により一部男女混合が4件。不明が1件で、男女混合で部門を設置しているものが最も多かった。

年齢（学年）別部門に設定された参加者の最少年齢[注10)]をまとめたものを図4に示す。参加者の最少年齢は、「8・9才」（小3）が23件と最も多く、次に「6・7才」（小1）が17件。「9・10才」（小4）が10件と、特に小学校中・低学年が多かった。

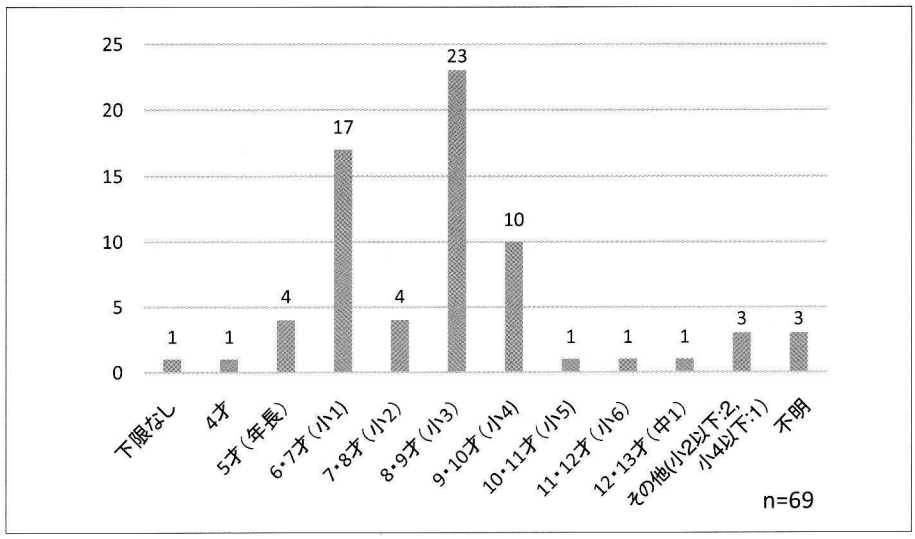

図4：参加最少年齢

年齢による部門分けの他に、バレエシューズ（以後、BSとする）で参加できるBS部門やBSによる審査（44件：63.8%）、PC部門の設置（20件：30%）などがあった。BS審査は特に小学生までの児童の部門で用いられることが多く、部門によって必須である場合と選択できる場合が見られた。PC部門の設置については、PCの7件と合わせると全部で27件のコンクールにおいて、PCもしくはPC部門が設置されていると考えられる。これは全体の約40%にあたる。PC部門は、順位をつけるものとつけないもの。そして順位はつけなくても得点上位者に特別賞などが与えられる場合があった。注の8）でも述べたとおり、本調査で一般的なコンクールとして扱ったものの中にも、PCやPC部門という名称を使用せずに、PCの要素を含んでいるケースも含まれているため、さらに多くのPC的要素を含んだコンクールがあると推察される。

バレエ部門の中には、グループ部門（創作バレエ・創作舞踊を含む）やアンサンブルの部、パ・ド・ドゥ部門や趣味の部などが含まれていた。これは群舞や創作バレエ、趣味でバレエを楽しむ、もしくは順位を競う人向けのコンクールであることが読み取れる。また舞踊のジャンル枠を排除し、バレエ、モダンダンス、コンテンポラリーダンス、日本舞踊、フラメンコなど、すべての舞踊を一つの作品として、一つの部門で審査するものもあった。

(3) 審査について

審査内容は「ソロVaのみ（自由選択）」が44件（63.8%）と最も多く、「ソロVaのみ（課題曲より選択）」が14件（20.3%）。「部門により異なる」が7件、「不明」が4件であった。ソロVaの審査と並行して、レッスン（もしくはアンシェヌマン）審査の両方を行うものが7件。部門によって1曲ではなく、複数のVaを踊るものが6件あった。また、審査の段階によってこれらが変化するものも見られた。

図5に曲目の制限時間を示した。部門数はコンクールによって異なり、またその制限時間も部門によって異なっていた。制限時間で最も多かったのは、「2分1秒～3分以内」で全体の約70%であった。

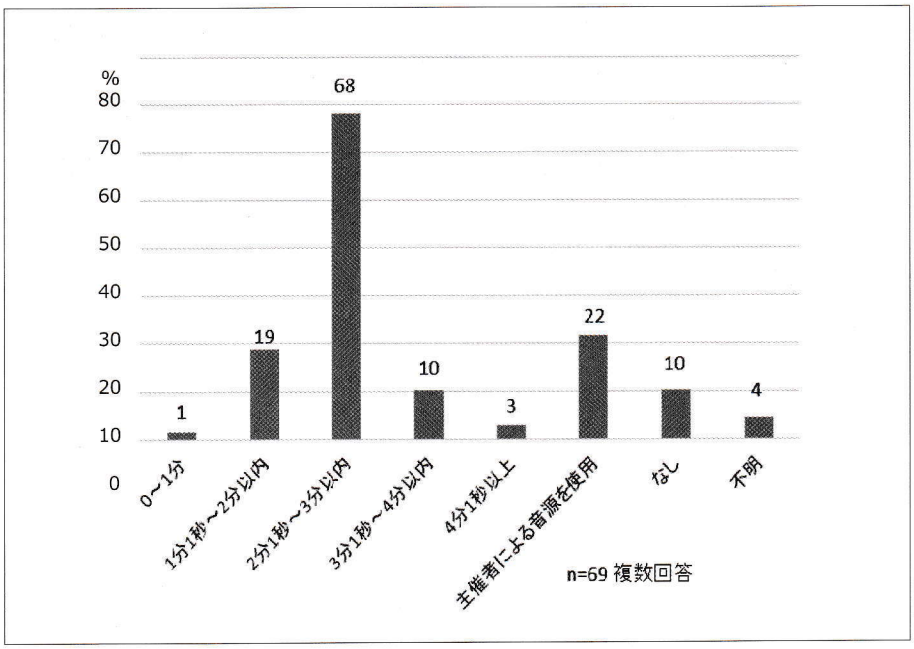

図5：曲目の制限時間

次に審査基準・規定の提示についてであるが、25件（36.2%）においてこれらの記載があり、44件（63.8%）において、これらの記載が「なし」もしくは「不明」であった。審査基準・規定を提示している場合には、審査員の採点方法や集計方法（17件）、審査の観点（15件）などを提示していた。これらの両方を

記載しているものは、7件あった。審査員情報の提示については、54件（78.3%）において審査員の氏名を公開しており、3件については、一部情報のみを公開していた（12件は不明）。

審査情報の公開については、42件（60.9%）がこれらを行っており、27件（39.1%）においては行われていなかった。審査情報の公開方法は、アドバイスシートなど審査員の講評が書き込まれたシートを配布するケースが25件（このうち1件は、口頭による講評とセット）。順位結果などの審査データの公開が20件。これらの両方を行っているものが6件。口頭による講評が3件であった。また、出場部門によって情報公開方法が異なっている場合もあった。

(4) 賞品について

順位をつけるコンクールでは、上位入賞者に賞状が贈られ、上位の他に特別賞を設けているものがほとんどであった。コンクールによっては、特別賞の種類を多く設けている所もあり、参加者の2/3以上や参加者全員が賞をもらえるといったものも見られた。プロ契約・研修、海外留学などの将来的な活動に繋がる賞品があるコンクールは、全部で27件（39%）であり、そのうち、国内バレエ団との契約・研修があるものは7件であった。これらの賞品は、上位入賞者へ順位に伴って自動的に贈られる場合と、受賞者がバレエ団や留学先を選択できるタイプなどがあった。また留学の場合、海外バレエ学校や大学などへの短期もしくは長期留学（スカラシップやフルスカラシップを含む）。海外バレエ学校主催のサマースクールやセミナー。海外ワークショップの受講権などがあった。これらの他に、海外BCへの参加権や海外BCの予選審査が免除されるシード権などがあった。

V. 考察

以上、2015年一年間のBCの開催状況と、その内容に関する情報を整理してきた。これまで整理した情報をバレエ教育の視点から考察し、BCが抱える問題点について検討していく。

V－1. 2015年一年間のコンクール開催状況

(1) 日本のBCの特徴

日本におけるBCはほぼ毎月、日本のどこかで開催されており、その総数は101件であった。コンクールの開催は、特に学生が夏休みである8月に最も多かった。開催回数は、5回以内のコンクールが全体の50%以上を占めた。通常年に一度、コンクールが開催されているとすると、特に近年五年以内にコンクールが増加したことが推察される。また、開催20回以内のコンクールは全体の約80% 以上に上り、その一方で歴史あるコンクールは全体の約10%程度にしか満たないことが分かる。伝統的なコンクールは開催する度に参加者の水準が上がっていくと考えられる。そのため、参加者がコンクールを選択する際には、伝統的なものか、新しいものか、自分の参加目的・レベルに合った選択が必要であることが示唆された。

(2) 主催団体について

主催団体の合計は51団体で、その内14団体は年に二回以上コンクールを開催している。101件の総コンクール数のうち、62件がこの14団体によって主催されていた。同一団体が複数のコンクールを開催している場合、全国各地でコンクールを行っている場合と、PCとセットで開催しているケースがみられた。

主催団体の分類では、「実行委員会・事務局」が全体の約60%と最も多かったが、これらの組織の詳細情報を記載しているものはほとんど見当らなかった。また、主催団体が「不明」であるコンクールが約10%あ

ることから、全体の約70%のコンクールは、主催団体・主催者の詳細が不明であると言える。主催者が不明ということは、参加者がBCに参加する上で、もしくは参加するコンクールを検討する上で問題があると言えるだろう。

V－2．コンクールの内容について

(1) 日本のBCの種類

2015年一年間に開催されたBCは、名称別に分類すると全部で69種類であった。そのうち32種類（全体の約半分）は年間を通して、重複して開催されていた。PCは全部で7件あり、国際的なコンクールは5件であった。したがって、BCの内容を大きく分類すると、一般的な（順位をつける）コンクール、PC、国際的なコンクールの3種類に分けることができると言えた。

PCは、「PC部門」という部門の中に設置されているケースも多くみられた。これをPCと題されたコンクールと合わせると、全体の約40%のコンクールにPCもしくはPC部門があることが分かる。これらは、一般的なコンクールに挑戦するにはまだ早いと考えられるバレエ学習者にはむしろ有効な場であり、BCに出場する参加者全体の水準を上げる助けとなっていることが推察される。また、PCやPC部門は、参加者に対して積極的にアドバイスシートなどの配布を行っている所が多いため、参加者の今後のバレエ教育へ大きく貢献していると言えるだろう。

(2) 開催目的と部門の設置に見られる問題点

開催目的において最も多かった内容は、「次代の発掘・育成・教育、人材発掘・育成」で、その次に、「(舞踊) 文化・芸術の普及・振興・発展のため」、そして「不明」と続いた。このことから、多くの主催団体が舞踊界の次代育成・発掘を目指しており、そこから舞踊文化、さらには芸術の振興・発展へと繋げていきたいと考えていることが推察される。その一方、「不明」である団体が目立ったことは、岸辺（クララ編, 2013：12）が懸念しているように、コンクール開催という点では問題があると言える。また、開催目的や主催団体については、参加者が参加するコンクールを選択する際に考慮に入れる大事な要素の一つであると考えられる。このように、これらの詳細な情報提供がないコンクール開催には問題があると言えるだろう。

年齢（学年）別部門設置については、1件を除くすべてのコンクールにおいて、これが設置されていた。このことから、年齢に分けて審査を行うことの重要さを読み取ることが出来る。男女別部門の設置については、男女混合で部門を設置しているものが全体の約80%であった。バレエの競技人口（参加率）は男子に比べて女子が圧倒的に多いことが分かっているが（高橋ら, 2013：91）、バレエのテクニック上、男女の踊り方には大きな違いがある。これらを一緒に審査し、公平に得点化するためには、厳格な審査基準が必要であると考えられる。ボリショイバレエ団のユーリ・グリゴロヴィッチは、「部門のエントリー数が3人で上位入賞者が決まってしまってもよいから、絶対に男性部門を設けるべきだ」（阿部, 1999：29）と主張しており、男女別部門での審査の重要性を述べている。男女混合部門が設置されているコンクールのうち、男女を公平に審査する審査基準が存在しているものは果たしてどの程度あるのか、今後検証していく必要があるだろう。

参加最少年齢の設定については、「8・9才」（小3）が最も多く、特に小学校中・低学年に設定しているものが多く見られた。この年代の児童がBCに参加出来るという事は、バレエ教育の視点から考えると、大きな二つの問題点を抱えていると考えられる。まず一つ目は、児童がBCに参加することにより、そのダンサーの生理的な成長を阻害してしまう恐れがあるということである。BCに小学生の参加が可能であることは、海外では見受けられない。その理由として、海外のバレエ学校などでは、伝統的なカリキュラムが設定され、小学校低・中学年の年齢では、通常、バレエの基礎の勉強が始まったばかりの段階だからである（現

に海外の国際BCを見ても、参加最少年齢の設定は、15才とする所が多い[注11])。本来この世代は、何度も反復して基礎を身に付け、正しい身体づくり・身体使いを身に付ける段階であると考えられている。しかし、日本において小学生をBCに出場させているケースでは、高度な技術の獲得を目指す稽古や、過度な反復練習が行われたりすることがある。また、後述するように幼少期のダンサーの成長には本来ふさわしくないと考えられるトウシューズ（以後、TSとする）を履かせるという行いも行われる場合があり、このような指導によって、将来、そのダンサーの生理的な成長を妨げる可能性が高まることも推察される。

中でも特にTSを何歳で履くのかという問題は、バレエ教育界においても重要な問題である。バリンジャーらによると、TSを何歳で履いてよいという具体的な指標はなく、ワガノワやチェケッティ、RADなどの世界的なバレエ・メソッドにおいてもそのような指示はないという（バリンジャーら，2015：182）。しかし、IADMS（International Association for Dance Medicine & Science　国際ダンス医科学学会）は、こうした現状に警鐘を鳴らすべく、「TSの練習を始めるためのガイドライン」を作成した（Davidほか，2009）。その中で、IADMSはTSの練習を早く始めすぎることがもたらす危険性を示している。これによると、TSを履き始める時期は、生徒の身体の成長段階、体幹、腹筋、骨盤のコントロール、脚などの骨格のアライメント、筋力と柔軟性、レッスンの頻度と期間など、様々な要素を注意深く評価した後に、決定すべきであると述べている。また、「決して12才以下で（TSを）履いてはいけない」と提言している。したがって、これらのことを加味しても、児童のコンクール参加には、参加者やその保護者の確固たる参加目的と、指導者の力量と良識が問われると言えるだろう。また、指導者にはTSの使用の有無についての責任の重さを改めて考える必要があるだろう。

二つ目の児童のBC参加に伴う問題点は、課題曲の選曲についてである。スターダンサーズ・バレエ団の新井は以下のように述べている。「Vaは通常、主役やソリストの踊りであり、それらは技術だけでなく、表現も重要な要素で、それをマスターした大人のダンサーたちに踊られるよう振付られているのに、10歳前後でバレエを習い始めてあまり年月の経っていない児童が踊る所に問題がある。～中略～ 大人の大プリマのまねをして踊らされている児童が非常に多く、子供らしさがまったく見られない時がありました。ですから、選曲も非常に難しいように思えます。全国各地で開催されているBCも児童参加の時は、課題曲を考えなくてはいけないと思います。バレエのVaは子供が踊るものではないと思いますが。～中略～ 幼い児童がコンクールに出場すること自体に問題があると思います。」（新井，1999：15）このように新井は、特に児童には課題曲を設ける必要があることを指摘している。また松本は、児童が誤った課題曲を選択することは、踊る本質である役柄への理解を疎かにして、テクニックだけに集中し、自分を見失う危険性があると述べている（松本，2007：37）。そのため、ユーリ・グリゴロヴィッチがいうように、課題曲の選択には、子どもたちの「オルガニズムをよく考えて、肉体的・精神的・演技的に適切な課題を選ぶ」（阿部，1999：30）必要があると言えるだろう。つまり、高度な技術よりも基礎・芸術性・表現性を大切にし、役の解釈に特に重点を置く必要があると考えられる。

さらに波多野は、あまりに早い時期に完成された踊りをしてしまうことや、年齢が低い時期に大きな賞をとってしまったがために、伝統ある演目を深く理解しえるチャンスを失うケースが存在していることや、これらがダンサー人生にとっては大きなマイナスになることを指摘している（波多野ら，2007：38）。このように、児童のBC参加には様々なリスクを伴うと考えられ、これらは子どもたちの将来を左右する大きな問題を含んでいることを意味している。そのため、指導者や保護者の責任は非常に重く、これらの問題点をよく考慮し、児童のBC参加を検討する必要があることが示唆された。

(3) 審査に見られる問題点

審査内容については、「ソロVaのみ（自由選択）」（63.8%）が最も多かった。すでに前項で児童における

選曲の重要性を述べたが、ほとんどのコンクールがVa一曲のみで審査することを考えると、Vaの選曲はどの参加者にとっても重要であることが推察される。

曲目の制限時間は、「2分1秒～3分以内」が全体の約70%と最も多かった。したがって、多くのBCにおいて、3分以内でその参加者の評価が決まるということになる。審査する側も2～3分の短い分数の中で、何百人という参加者を審査しなければならないということの責任の重さと不安を感じているという（石井，波多野，2007：36，38）。短い時間の中でいかに公平かつ厳正な審査をするかという点は、審査員の手腕が問われる所であり、参加者はこの3分の間にいかに自分が持っているものを表現するかが重要であると言えるだろう。

一方、一人の評価を僅か3分程度のソロVaだけで判断できないとの思いから、ソロVaの他に、レッスン（もしくはアンシェヌマン）審査も併せて行うもの。部門によっては一曲ではなく、全く質の異なる複数のVaを踊るものなどもみられた。これらは参加者をじっくり見て評価するという点において、意義があると思われる。その他にも審査員によるワークショップやセミナーを同時に開催するものなどもあり、BCという場がただの競走だけの場ではなく、教育の場として積極的に利用されていることが推察される。

審査基準・規定の提示については、36.2%においてこれらの記載があり、逆に約60%においては、これらの記載がなされていなかった。審査基準・規定を提示している場合には、審査員の採点方法や集計方法、審査の観点などを提示していた。これまで述べてきたように、審査基準はコンクールの根幹を司る重要な部分であり、これらが公表されないコンクールは問題があると言えるだろう。無論審査をする審査員の間には、審査基準が設けられていることが推察されるが、どのような方法で、そしてどのような観点・基準でこれらが行われているかが重要である。これらの情報は参加者がコンクールに参加する上で知る権利があり、知るべき情報であると考えられる。今後、さらなる調査・検証が必要である。

一方、審査員情報の提示については、ほとんどのコンクールにおいて情報が提示されていた。これはコンクールを主催する団体が不明瞭であることと対照的に、審査員情報を公表することによって、各コンクールが各自の特色をアピールしていることの表れであると推察できる。したがって参加者たちは、主催団体よりも審査員が誰であるかによって、参加するコンクールを選択している可能性が高いことが考えられる。審査員情報の公開はコンクール開催に伴い、参加者側、主催者側の両方にとって、重要な要素であることが示唆された。

審査情報の公開については、約60%近いコンクールにおいて行われていた。情報の公開方法は、①アドバイスシートなどの審査員の講評が書き込まれたシートを配布する。②順位などの審査データの公開。③①と②の両方を行っているもの。④口頭による講評があった。若松が審査情報の公開について、「舞踊界の合理化に必須である。」（若松など，1996：157）と述べるように、情報の公開はそのコンクールの審査の透明性を示すものであり、各コンクールの信頼度を計る大きな手掛かりになると思われる。また、同時に参加者は順位や講評を頼りに、現在の自分を見つめ直すきっかけになると考えられる。そのため、バレエ教育の側面からみても、審査情報の公開はBCの開催には必須なものであることが示唆された。

(4) 賞品について

順位をつけるコンクールでは、上位入賞者には賞状が贈られることがほとんどで、上位入賞の他に特別賞を設けているものが多かった。コンクールによっては、特別賞の種類をかなり多く設けている所もあり、参加者全員が何か賞がもらえるといったものも見られた。これは、参加者のモチベーションを上げるために行われていることだと推察される。多くの参加者に入賞することを体験させることで、更なるバレエ学習意欲の向上を狙っているものと考えられる。

プロ契約や研修、海外留学などが賞品となっているコンクールは、全体の約40%であった。これらの賞

品の内容は様々であり、国内・外のバレエ団への入団や研修、海外バレエ学校への短期もしくは長期留学、サマーセミナーやサマースクールなどへの参加権があった。参加者がこれらの賞を受賞出来た場合、今後の人生にかなりの影響を与えると思われる。そのため、これらの賞品は、参加するコンクールを選択する際に検討する重要な要素の一つであると推察される。

Ⅵ. まとめ

本研究では、現在、日本で開催されているBCについての情報を収集し、その開催状況と内容を明らかにした。また、この結果とこれまで指摘されてきたBCが抱える問題点とを比較し、バレエ教育の視点から見た現在の日本におけるBCの問題点を改めて確認した。その結果、以下のような知見を得ることが出来た。

1．2015年一年間に開催されたBCは101件であり、日本全国、毎月どこかでBCが開催されていた。内容を名称別に分けると全部で69種類あり、このうちの約半分は同内容のものであった。過去五年の間に開始されたものが特に多かった。

2．BCは大きく分けて、一般的な（順位をつける）コンクール、PC、国際的なコンクールがあり、特にPCはバレエ教育に大きく貢献しているコンクールであった。

3．本調査で明らかになったBCが抱える問題点は、以下の二点である。

1）主催団体の運営者や開催目的、審査基準の提示など、参加者がコンクールを選択する際に考慮に入れると考えられる情報が、正しく提示されていない場合が多い。

2）バレエ教育上、児童（特に小学校低・中学年）のBCへの参加には様々なリスクを伴うことが考えられ、この年代のコンクール参加には熟慮が必要である。

近年では日本のみならず、世界のBCでも多くの日本人が参加、上位入賞を果し、世界各地で活躍するダンサーが増えている。そのため、いまや日本のBCは、バレエ界の底辺を広げ、今後の発展のために無くてはならない存在であると言えるだろう。しかしその一方で、BCが抱える問題点は多く、今回明らかになった点は、ほんの一側面でしかない。今後も、様々な側面からの研究が必要である。

BC審査員経験者や、BCを経験した現在活躍しているプロバレエダンサーたちは皆、口を揃えて、コンクールは通過点、参加にはしっかりとした目的を持つ必要があると言う。BCに参加する際には、本研究で明らかとなったことを踏まえ、しっかりとした目的・目標設定を行う必要があると言える。そして、それらを見失うことなく、各自の目的に合ったコンクールを選択することが何よりも重要であると考えられる。

注

注1）2013年6月末時点のデータでは、日本国内で開催されているBCは61件であった。バレエ部門だけがあるコンクール（45件）の参加者数は延べ15,458名であった（クララ編，2013：79-87）。バレエ部門が他の部門と並行して開催されているBCの参加者はこの数に含まれていないため、実際の参加者数はさらに増加していることが見込まれる。

注2）若松は、ある審査員が指導する門下生の作品に最高点を付け、そのライバルに最低点をつけたことがあったことを述べ（1960年代）、コンクールの審査が公平かつ妥当なものでなければならないと述べている（若松ほか，1996：148）。

注3）バレエ部門は、1968年開催の第25回から設置された（夏目ほか，1994：10）。

注4）『バレリーナへの道』は、1991年の創刊以来、BCに関する記事をある程度掲載している。中でも2007年には、「バ

レエ&ダンスコンクールのいま」という特集が組まれ、2007年時点での日本で開催されている主要なBCの詳細情報を掲載している。

注5）2015年1月1日～12月31日までに発行された『旬刊音楽舞踊新聞』（No.2941～2960）、『週刊オン・ステージ新聞』（第2033号～第2074号）、『ダンスマガジン』（1月号～12月号）、これら三つのバレエ関連誌・新聞に掲載されている情報を収集した。

注6）中には、2015年度の開催履歴があるが、詳細情報については2013年度のデータしか載っていないケースがあったため、この場合は2013年度のデータを参考にした。

注7）主催団体の名称が異なる場合でも、同一のHPに情報掲載があった場合には、同一主催者扱いとした。

注8）本研究におけるPCとは、コンクールの名称に「PC」や「プレパラトリー」が含まれているものとした。したがって、実際のBCの趣旨や目的などにPCと同様の要素が含まれていても、本研究においてはPCとして扱っていない。ただし、PC部門が設置されているものに関してはその旨を記載し、PC部門として扱った。

注9）ここでの国際的なコンクールとは、①応募要項の中に英語などの記載があり、積極的に海外参加者向けの対応を行っているもの。②海外で開催されるコンクールの予選。①②のいずれか、もしくは両方が該当し、順位をつけるもの、これを国際的なコンクールと呼ぶ。

注10）部門の年齢（学年）枠は各コンクールによって異なり、「開催初日の年齢や学年」や「開催年の4月時点の年齢や学年」、詳細な記載がないものなどがあった。本調査では、これらを学年にまとめて集計し、該当年齢を併せて記載した。

注11）各国の代表的なBCの参加最少年齢は、ヴァルナ国際BC、ヘルシンキ国際BC、上海国際BC、ローザンヌ国際BCが、いずれも15才。モスクワ国際BC、韓国国際BCは14才であった（この情報は、各BCHPの過去最新大会の情報を参考にした）。

引用・参考文献

1） 安達哲治，2014，『バレエコンクール　審査員は何を視るか？』，株式会社健康ジャーナル社：東京，8.

2） 阿部由実，1999，「バレエコンクール　第9回全国バレエコンクールin Nagoya」，『バレリーナへの道』，28：26，29-30.

3） 新井咲子，1999，「バレエコンクール　第32回埼玉全国舞踊コンクール　クラシック部門第2部の審査について」，『バレリーナへの道』，28：15-16.

4） ジャニス・バリンジャー・サラ・シュレジンガー，佐野奈緒子訳，2015，『ポアントのすべて』，株式会社大修館書店：東京，182.

5） 張瓊方・木山慶子，2015，「コンクールで上演された台湾原住民舞踊作品の特徴」，『日本体育学会大会予稿集』，66：89.

6） クララ編，2013，『バレエ・コンクール　パーフェクト・ガイド』，株式会社新書館：東京，12，79-87.

7） 『ダンスマガジン』，2015，1月号～12月号：全面.

8） David S. Weiss, M.D., Rachel Anne Rist, M.A., Gayanne Grossman, P.T., Ed.M, 2009, "When Can I Start Pointe Work? Guidelines for Initiating Pointe Training.", Journal of Dance Medicine and Science, 14（3）：90-92.

9） 花城洋子，2000，「琉球舞踊におけるコンクールの推移と実態に関する調査—1996～1999年の調査より」，『比較舞踊学研究』，6（1）：1-12.

10） 花城洋子，2001，「琉球舞踊コンクールにおける＜批評文＞の役割—型の基準化の観点から」，『比較舞踊学研究』，7（1）：21-32.

11） 花城洋子，2005，「近年の琉球舞踊における芸能活動の実態—旧・現コンクール期（1954年～2000年）を中心に」，『名桜大学総合研究』，7：75-87.

12） 花城洋子，2006，「琉球舞踊コンクールの課題作品の重要性と特性についての考察—国立劇場琉球芸能公演・沖縄

県芸術祭公演における上演率の分析より」,『比較舞踊学研究』, 12 (1) : 54-65.

13) 波多野澄子・本田世津子・橋浦勇, 2007,「クラシックバレエ審査員に聞く—審査のポイント・アドバイス」,『バレリーナへの道』, 67 : 38-40.

14) 林裕子・和田伊通子・頭川昭子・若松美黄・松浦義行, 1989,「国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品の一傾向〔その1〕: 舞踊作品の運動分析を中心にして」,『日本体育学会大会号』, 40B : 659.

15) 石井清子, 2007,「クラシックバレエ審査員に聞く—審査のポイント・アドバイス」,『バレリーナへの道』, 67 : 36.

16) 松本道子, 2007,「クラシックバレエ審査員に聞く—審査のポイント・アドバイス」,『バレリーナへの道』, 67 : 37.

17) 夏目十郎・伊藤修・藤田瀧次郎・宮川淳二・馬越元・熊谷久美子編, 1994,『全国舞踊コンクール　50年史』, 東京新聞 : 東京, 10, 33-34.

18) 旬刊音楽舞踊新聞, 2015, 1.1～12.31, No.2941-2960, 秦野, 全面.

19) 週刊オン・ステージ新聞, 2015, 1.1～12.31, 第2033号 - 第2074号 , 東京, 全面.

20) 高橋あゆみ・海野敏・小山久美, 2013,「日本のバレエ教室における生徒の人数・性別と教育内容の関係—『バレエ教育に関する全国調査』に基づく考察—」,『研究紀要』, 32 : 86-98.

21) 田中良江, 1988,「日本における教育舞踊の歴史—その変遷過程—4—児童舞踊コンクール」,『鶴見大学紀要第3部　保育・保健歯科編』, 25 : 101-112.

22) 海野敏・高橋あゆみ・小山久美, 2012,「日本のバレエ教育機関における教師の現状と課題—『バレエ教育に関する全国調査』に基づく考察—」,『舞踊學』, 35 : 13-22.

23) うらわまこと, 2007,「バレエ&ダンスコンクールのいま　日本のコンクール事情　わが国舞踊界の現実を示すコンクールラッシュ　参加にはしっかりした目的をもって」,『バレリーナへの道』, 67 : 34-35.

24) うらわまこと, 2013,「審査員に聞く、評価のポイント①　部門によって審査の基準を変えています」,『バレエ・コンクール　パーフェクト・ガイド』: 50-51.

25) 若松美黄・湯川治敏, 1996,「舞踊コンクール採点集計方法の研究—偏差値を用いて—」,『筑波大学体育科学系紀要』, 19 : 147-158.

26) 米澤麻佑子・寺山由美, 2012,「現代舞踊コンクール入賞後のダンス活動に関する研究」,『筑波大学体育科学系紀要』, 35 : 133-141.

27) 頭川昭子・松浦義行・若松美黄・林裕子・和田伊通子, 1989,「国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品の一傾向（その2）: 舞踊作品のイメージ分析を中心にして」,『日本体育学会大会号』, 40B : 660.

28) 頭川昭子・林裕子・松浦義行・若松美黄・和田伊通子, 1990,「国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品の一傾向」,『体育科学系紀要』, 13 : 91-99.

29) 頭川昭子・松浦義行・若松美黄, 1991,「国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品のイメージ : 因子解の類似度からの共通次元をもとにしたイメージ分析」,『日本体育学会大会号』, 42B : 700.

30) 頭川昭子・松浦義行・若松美黄, 1992,「国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品のイメージ : 共通意味空間におけるイメージ分析」,『体育科学系紀要』, 15 : 81-91.

31) 頭川昭子・横山裕子・高橋うらら, 2003,「国際創作舞踊コンクール受賞作品の外的イメージと内的イメージの関連」,『身体運動文化研究』, 10 (1) : 45-68.